

学校経営のポイント

“命のアサガオ”を育てる小学校

若井 彌一

早いもので、学校はまもなく卒業式の時期を迎えようとしている。1年間の学校経営や教育実践の取り組みをふり返ってみる時期でもある。

そんな時期に、心なごむ学校経営・教育実践の取り組みが報道されたので、紹介を兼ねて実践の参考に供したい。

“命のアサガオ”が冬に咲いた小学校

報道の概要は、次のようなものである（2月18日、Yomiuri On Lineによる）。

約10年前に白血病で亡くなった新潟県中条町の小学生・丹後光祐（こうすけ）君（当時7歳）が大切に育てていた“命のアサガオ”が、上越市立高志小学校（児童数445人・長野克水校長）の2年2組の教室で花開いた。

光祐君は、小学校に入学直後に白血病で入院した。3ヵ月間という短期間の学校生活であったが、光祐君はアサガオを大切に育てていた。この取り組みは、同君の死後、母親や「にいがた・骨髄バンクを育てる会」によって広められていった。

高志小学校では、2年前の春から“命のアサガオ”を育てはじめ、その年の冬、季節外れの花が咲いたという。そして、この冬も花が咲き、光祐君の母親が同校を訪れ、児童らに命の大切さを訴えた（“命のアサガオ”と骨髄バンク登録に関する問い合わせは「にいがた・骨髄バンクを育てる会」（025-233-5963）まで）。

*

花を育て咲かせる取り組みは、多くの小学校や中学校で行われているものである。高志小学校の取り組みもその一例ということになるのだが、短い生涯をアサガオを育てながら前向きに生きた一人の児童の願いを受け継ぐ試みとして、重いもの（積極的意義）

がある。光祐君の育てたアサガオの約30粒の種は、すでに約50万粒にまでなったというから、“命のアサガオ”育ての取り組みの着実な広まりが窺われる。今後のさらなる広まりを期待したい。

命の重さを考え、人生を深く生きる力を育む

国内外の現実には目を転ずれば、一人ひとりの人間の生命がいかににはかないものであるかに否応なしに気づかされる。

国際紛争の焦点となっているイラクでは、連日のように「自爆テロ」の犠牲者がでていく。殺人事件報道や交通事故を含む事故死の報道、病死（お悔やみ）報道も日常的に行われている。死は、われわれ誰にとってもけっして遠い存在ではない。

この冷厳な事実から目をそらすのではなく、有限なればこそ、その有限の生命を自他ともに大切に生きていくことの重要性を児童・生徒に考えさせ、理解を深め、人生をより深く生きる力の土台を築いていくことに意を用いたい。

「人生をより深く生きる力」という表現は、子どもの読書活動の推進に関する法律（平成13年12月12日、法律第154号）第2条の「基本理念」規定において用いられているものである。読書活動が「人生をより深く生きる力」を身につけていくうえで欠くことのできないものであることを説明する文脈で用いられている表現である。

読書活動の重要性は今さら説明するまでもないが、読書活動とともに、児童・生徒がそれぞれの標準的発達段階あるいは個別的な発達状況に応じて、無理なくできる植物や動物の世話活動を、学校教育や家庭教育の一環として組み込んでいくことの教育的意義も改めて確認し、その取り組みの充実を期したい。

（わかい・やいち＝上越教育大学教授）

●新刊案内● 緊急出版！ 4月（新学期）からこの改訂が適用されます

教育開発研究所刊

2月16日刊 好評発売中！ 改訂のポイントを徹底解説 / B5判 220頁・定価2500円

『改訂学習指導要領 全文と要点解説』

研修誌・図書の小社への直接注文は、無料FAX 0120-462-488をご利用ください（24時間受付・即日発送）